?と!が生まれる自然環境

園庭に木を植えることで、子どものあそびが豊かになった東京ゆりかご幼稚園。どのようなことを大事にして木々を植えていったのでしょうか。

監修＝大澤 力（東京家政大学教授）

自然を取り込む園庭作り vol.11

子どもの傍らに樹木を

執筆＝内野彰裕（東京都・東京ゆりかご幼稚園園長）

かつて当園には、200本を超える大小さまざまな樹木が、園庭をぐるりと囲むように植えられていました。

あるとき、外壁工事のために多くの樹木を移植しなくてはならなくなり、1/3程度は根付く見込みがないということで、やむなく伐採しました。伐採された木は手作りおもちゃにしたり、園の環境作りに生かしたりしましたが、木の少なくなった園庭であらためて、樹木の存在の大きさを認識したのです。四季を通して樹木との多様なかかわりを見せる子どもたちの姿や表情、興味・関心への深まりを痛感し、今まで以上に子どもたちと樹木との関係が近くなるような植林を考えるようになりました。

木を植えるときに意識したことは、次の3つです。

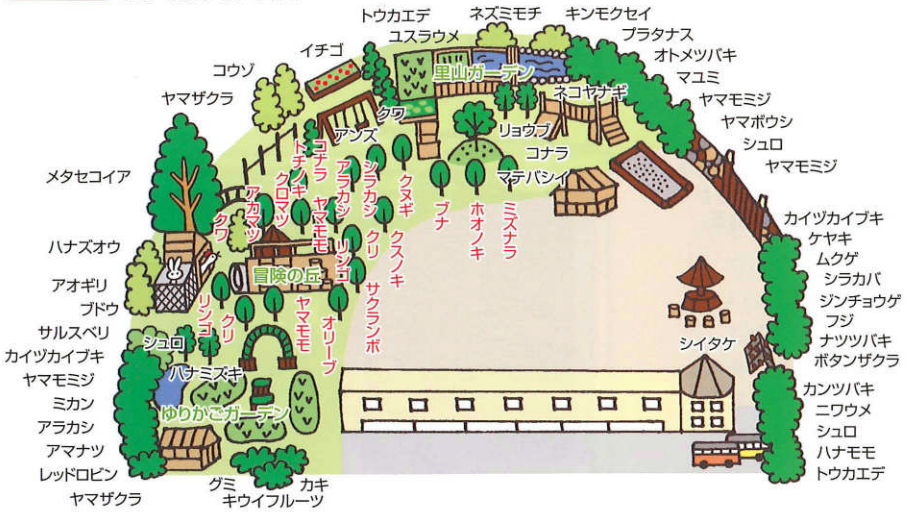
①それまでの樹木は園庭周囲にあったが、遊具周辺や園庭中央に向けて植えたこと。これによって子どもの樹木とのかかわりやあそびがより豊かになっていった。

②小川や田んぼの「里山ガーデン」と果樹に囲まれた築山「冒険の丘」、栽培園の「ゆりかごガーデン」という点在していた自然環境をつなぐように、近隣の雑木林に見られる樹木を植え、林のビオトープを作ったこと。これによって「点のビオトープ」が「線のビオトープ」になり、生き物が行き来できる環境が形成され、子どもの生き物探しがより活発になっていった。

③子どもの興味をくすぐる木、保育に生かせる木、地元の雑木林にある木を中心に選んだこと。これによって葉、実、枝、樹皮などを使ったあそびが展開されていった。

既存の固定遊具でのあそびとは異なり、木という「命あるあそび環境」で育つ子どもの豊かな心にふれ、木は、園において最も必要な保育資源であると感じています。

樹木図 新たに植えた木は、赤字で示しています。



さまざまな樹木が、環境と環境をつなぐように植えられている。

ときには、木に登ってドングリを探す。

※このページでは、「いつでも自然とふれあえる園庭」を目指して、保護者と子どもと保育者で園庭改造に乗り出した東京ゆりかご幼稚園の実践を、1年間ご紹介します。来月は「樹木への親しみをはぐくむ」です。

写真提供＝東京ゆりかご幼稚園